出張講義

テーマ： 古典類にみる日本人と災異観（さいいかん）

担当：小林　健彦（こばやし　たけひこ）✽
日時：２０２１年６月１５日（火曜日）
５０分間
於：新潟県立長岡向陵高等学校

あらすじ：

日本では、古来、様々な**自然災害**―**大雨、泥雨、洪水、浸水、土石流、地滑り（陸上・水底）、地震、津波、火山噴火、大雪、紅雪、雪崩、雹、台風（大風）、暴風雨、竜巻（辻風）、落雷、高波、高潮、旱害、低温、高温、蝗害、黄砂、飛砂、塩害、山火事**等、そして、**人為的災害**―**疫病流行、戦乱、火災（失火）、盗賊・海賊、略奪行為**の発生等々、数え切れない程の**災害**が人々を襲い、人々はその都度、復旧、復興しながら、現在へと至る国家や、その基盤となって来た**地域社会**を形成、維持、発展させて来た。**日本**は列島を主体とした**島嶼国家**であり、その周囲は**水（海水）**で囲まれ、山岳地帯より海岸線迄の距離が短い。自然地形は狭小な国土の割には起伏に富む。その形状も南北方向に湾曲して細長く、列島部分の幅も狭い。日本では、所謂、「**水災害**」が多く発生していたが、それは比較的高い山岳地帯が多くて平坦部が少なく、土地の傾斜が急であるというこうした地理的条件に依る処も大きい。こうした地理的理由に依る**自然災害**や、人の活動に伴う形での**人為的な災害**等も、当時の**日本居住者**に**無常観・厭世観（えんせいかん）**を形成させるに十分な要素として存在したのである。

世界史的に見ても、**日本はあらゆる災害の多発地**であったし、その様相は現在でも変わりは無いのである。ここに住む限りに於いては、そうした**災異**は誰にでも降り懸かって来ていた。それ故の、**独特で、固有の感性＝対災異観**を、ここに住み続けて来た人々は伝統的に醸成して来たと言うことができる。

文字認知、識字率が必ずしも高くはなかった**近世以前の段階**に在って、人々は**口承、地名、石造物等の方法論**を以って、そうした**災害情報を後世へ伝達**するべく、多大なる努力を払っていたものと見られる。そうした時期でも、**文字**を自由に操ることのできる限られた人々に依った記録、就中（なかんづく）、**災害記録**は作成されていた。特に古い時代に在って、それは**宗教者（僧侶や神官）や官人等**に負う処が大きかったのである。**正史として編纂された官撰国史**の中にも、**古代王権**がある種の意図を以って、多くの**災害記録**を記述していた。ここで言う処の「**ある種の意図**」とは、それらの自然的、人為的事象の発生を、ある場合には**自らの都合の良い様に解釈をし、加工し、政治的、外交的に利用、喧伝**することであった。その目的は、**災害対処能力を持ちうる唯一の王権**として、自らの「**支配の正当性、超越性**」を合理的に主張することであったものと考えら

れる。

それ以外でも、取り分け、**カナ文字（ひらがな）**が一般化する様になると、記録としての個人の**日記**や、**読者**の存在を想定した**物語、説話集、日記、紀行等、文学作品**の中でも、各種の**災害情報**が直接、間接的に記述される様になって行った。ただ、文学作品中に描写された**災害事象**が全て事実であったとは言い難い。しかしながら、それも最初から嘘（うそ）八百を並べた内容では、読者からの支持を得られる筈も無く、その作成に際しては、素材となる何らかの事象（実際に発生していた災害事象）を元にして描かれていたことは、十分に考慮されるのである。従って、文学作品中には却って、真実としての、当時の人々に依る**対災異観や、ものの見方、思想**が包含されて反映され、又は、埋没していることも想定されるのである。

都が**平安京（京都市）**に移行する以前の段階に於いては、「**咎徴（きゅうちょう）**」の語が示す**中国由来の儒教的災異思想**の反映が大きく見られた。しかしながら、**平安時代**以降の段階にあって、それは影も形も無くなるのである。その理由に就いては、はっきりとはしていない。その分、人々に依る正直な形での**対自然観、対災害観、対社会観**の表出が、文学作品等を中心として見られる様になって来るのである。

ここでは、以上の観点、課題意識より、**日本**に於ける**対災異観**や、**災害対処の様相**、及び、**思想**に関して、最初から意図して作られ、又、**読者**の存在を想定し意識された「**文学作品**」を素材としながら、「**災害対処の文化論**」として窺おうとしたものである。作品としての文学に如何なる**災異観の反映**が見られるのか、見られないのかに関して考えてみたい。

今日の具体的な事例は「竹取物語」

概要：

「**竹取物語**」は、**平安時代**前半期に成立したものと推定されている一巻の**物語**である。主人公である**かぐや姫**の呼称より、「**かぐや姫の物語**」、その地上に於ける養父〔**竹取の翁、さかきの造（みやつこ）、造麻呂**〕の名称より「**竹取翁物語**」と呼ばれたりもする、日本人には馴染みの深い物語でもある。これは、**仮名（かな）物語**の初期に於ける作品であるものの、その**文体**や、**仏典、漢籍、東アジア史にも通じた教養**が裏打ちしている内容からは、庶民が生み出した作品であるとは言い難い。作者の男女の別も判然とはしないものの、恐らくは、**「真名（まな）」と総称された漢字、漢詩文、歴史中心の男子の教養体系**に詳しい、**皇族、貴族、寺社関係者男子**の筆に依ったものであろう。作者が男性であると推測される以上、カナを多用した物語作品の原作者として、彼の氏名が故意に残されなかったとしても、不思議ではない。**紫式部**の「**源氏物語**」（１００８年頃成立か）との関連性より、それ以前の成立と見られる。

日本人の生活文化に関わるいくつかの指標：

❶数字の「３」への拘りがある。それが当時の人々に依る慣習的時間経過に於ける１つの目安、区切りとされていたことが想定される。その理由に関しては、はっきりとはしないものの、「３」の数字の多用とは、人々があるべき安定した状態、物事が調和した状態を希求していた結果であるとも解することができた。「１」が１桁の奇数では最小の数字ではあるが、それは物事の始まりであり、起源であることから、単立では安定性云々という思考には合致しなかったものと推測される。古代より、容器としての鼎（かなえ）の足の数では３本が多いのは、こうした思考、空間としての安定性を重要視したからであろう。言語運用としても、「鼎談（ていだん）」、「鼎立（ていりつ）」、「三足鼎立」、「鼎足之勢」といった表現法が見られるのは、その証左（証拠）である。「竹取物語」に於いて、「３」への拘りがあったとしても、それは故意にではなく、当時の社会慣習に鑑（かんが）みるならば、むしろ、自然なことであったのかもしれない。作者も何ら考えること無く、殆んど無意識の内に「３」の数字を多用していた可能性すらある。「３」の数字よりもたらされる安定や調和とは、災害の無い平時であることを示すサインでもあった。

❷かぐや姫が昇天する８月１５日の日付、及び、その丁度１か月前に当たる７月１５日の日付が持つ意義に関して。「竹取物語」中に於いて、具体的な時間表記（日付）が記されていたのは、この２日のみであった。月の満ち欠けとは別に、地上側の経緯として、古来、８月１５日は年中行事として、放生会（ほうじょうゑ）の式日に当たり、それは、人が命を繋（つな）ぐ為に犠牲となった魚や鳥等を供養すると共に、日頃の殺生（せっしょう）を懺悔（ざんげ）する儀である。供養することとは、次の復活、再生に向けての最初のステップでもあった。８月１５日に於ける、かぐや姫に依る昇天とは、人間の行為に依って犠牲となった生き物の霊が昇天し、成仏（じょうぶつ）する状態を物語として表現（仮託）していたことも想定される。

又、前月の７月には、７月７日の七夕（乞巧奠、きっこうでん）や、７月１５日の盂蘭盆会（うらぼんゑ）といった、天空に関わる年中行事が執行される。七夕伝承は、日本や韓半島・朝鮮半島にも影響を与えた、紀元前９世紀以降に見られる中国起源の乞巧奠であり、牽牛（けんぎゅう）、織女（しょくじょ）伝承に基づくものである。そこでは、天空を流れる大河である天の川を挟んで、牽牛、織女とが１年に１回会合するのであるが、それ故、七夕は「水」との関係性の中にあったことも想定される。韓半島・朝鮮半島に於いても、牽牛、織女が流す涙と降雨とが関連付けられ、井戸水を彼らに備える祭儀も存在するのである。

かぐや姫が昇天する２、３日前に、自身を月の都の人であると告白して以降、「泣く」の動詞が多用され、それが涙雨であることや、かぐや姫に依る「天の羽衣」の着用と、その後に於ける昇天からは、「竹取物語」が「水」や「水災害」との深い相関関係の中に在った、換言するならば、この物語では、直接的な表現法を用いずにそうした痕跡を

内包させ、ある場合には、人々にそのことを思い出させようとした意図を感じ取ることができる。

取り分け、盂蘭盆会に於ける目連救母（もくれんきゅうぼ）の故事は、月世界より地上世界へと降下し、地上の人として一定の時間をそこで過ごし、８月１５日の深夜、かぐや姫を迎える為に地上へ降下して来た月の都よりの王の一行が、姫と共に昇天して行くシーンと重なる。かぐや姫の物語を盂蘭盆会に重ね合わせるならば、かぐや姫とは、モチーフとして餓鬼道（がきどう）に落ちた目連の貪欲な母親であり、彼女も又、供養されるべき対象でもあった。彼女は生前に他者への施しを怠ったことより、罰として地上世界（餓鬼道）へ落されたのである。しかし、ここでの一定の贖罪（しょくざい）期間を経て、彼女は許され（供養が終わり）、次のステージへと輪廻転生（りんねてんしょう）を繰り返すのであった。

❸「竹取物語」に於いては、「天の羽衣」の表現法にも見られる様に、羽衣伝承との錯綜、若しくは、その反映、影響等が見られる。その意味に於いて、かぐや姫の物語とは、羽衣伝承の完結編であるということが言い得るのである。羽衣伝承では、水浴びをしていた８人の天女の内、羽衣を盗まれて地上に残らざるを得なかった１人の天女が、後日に於いて発見した羽衣を身に着けて天へと帰還するが、地上で結婚をし、子供を設けた相手（夫）を天上界に呼び寄せる、というストーリーを持った伝承もある。こうした洪水伝承は、その基本形が、天➜地➜天、となっており、循環しているのである。かぐや姫の場合にも、ストーリー上では月で何らかの罪を犯したかぐや姫が、罰として地上へ降下させられ、贖罪期間が終了したことを以って、月への帰還が許されるという基本形を持っている。つまりは、水を媒介として循環しているのである。

❹物語の最終末では、「その（富士の山）煙、いま（未）だ雲のなか（中）へた（立）ち昇るとぞ、言ひつた（伝）へたる」と記し、富士山頂で焼却した不死の薬（壺）と御文（おふみ）から立ち昇る煙が、今でも尚、上空の雲の中へ上昇しているとしている。これを事実として解することはできないものの、しかし、ここには全く別の自然現象がその素材として使用されていた可能性が示唆（しさ）されるのである。

即ち、それは富士山山頂部火口よりの火山噴火の発生である。ここで言う処の煙とは、噴火後も尚、未だに火口部より立ち昇る噴煙という見立てである。それは、「日本紀略」（平安時代後期に成立した歴史書）に見られた承平７年（９３７）１１月度の噴火であった可能性が高い。若しかしたら、「竹取物語」の作者も、当該記事に触れていた可能性すらあるのかもしれないのである。不死の薬の壺と、かぐや姫の書いた御文より立ち昇る煙、それは生き物としての活火山富士山の山体や火口を壺の形状に見做した表現法であり、天上界に至る一筋の道でもあった。

❺「竹取物語」の前半部分では、かぐや姫のことを「変化（へんげ）の人」と表現する箇所が２か所ある。日本語運用に於ける「変化（へんか）」の語とは、語義とは又別の様態認識として、常住不変の否定であり、有為転変（ういてんぺん）、生々流転（し

ょうじょうるてん）の肯定、つまりは、**変化の甘受（かんじゅ）**であった。この世の中にある一切の事物とは、仮のものであり、**常に移り変わって行く**とした考え方は、特に日本に於いて根強く、その思想は平安時代後期以降に、仏説に基づく**末法（まっぽう）思想**の拡散とも相俟（ま）って、多発する**災異**を背景としながら**無常観**、**厭世観**を形成するに至っていたものと考えられる。その成因とは、直接的には**自然災害や人為的災害の圧倒的多さ**に起因していたものであった。**変化（へんか）すること**とは、この時期、誰にとっても**回避不可能な災異**として存在していたのである。

「**竹取物語**」に於いては、バックボーンとして**月が変化をして行く**ことに大きな意味を持たせていた可能性がある。特に、物語終盤の**７月１５日の月**から**８月１５日子（ね）の時の望月（もちづき。満月）**迄がそうである。但し、そのこと自体は文章上に表現されてはいない。**かぐや姫**も、地上に降り立った時点（「**光る竹**」）から、「**変化（へんか）の人**」になったのである。その成長度合いは超人的であり、それが**月世界との対比**に於いて、高速で進行していたことは、地上世界が如何に人間的で、生的であったのかを示していた。月世界に於ける冷たく、恐らくは無機的で、圧縮された時間的推移、つまりは、そこが「**変化**」することの少ない**異界**であり、**死の世界**であることを際立たせるという効果があったのである。

❻大納言（だいなごん）大伴御行（おおとものみゆき。飛鳥時代の官人）には、**かぐや姫**から「**竜の頸に五色に光る玉**あり、それを取りて給（たま）へ」という難題が出題された。**御行**はその課題の達成を他人任せにはせず、自ら大海（たいかい）へと船を漕ぎ出して行ったとする点では、動機付けの程は兎（と）も角（かく）も、**かぐや姫**の要求に対して、誠実に応えようとした姿勢が窺われる。彼の場合には、**かぐや姫**に依る誠実さに欠けた要求との見事な対比を見せている。その際の**御行**の発言部分には、「この国（日本）になき、**天竺（てんじく）・唐土**の物にもあらず。**此国（日本）の海山より、竜はをり上る**物也」と記され、**龍**がインド、中国方面ではなく、**日本国内の海や山から出たり、入ったりしているという認識**を示す場面がある。これには、日本ならではの**龍体観、地下世界観**が示されていたのである。「**竹取物語**」の記述からは、こうした**龍体観、地下世界観**の起源が、「**竹取物語**」の成立した西暦１，０００年代に至る迄の日本に於いて、既に行なわれていたことが類推される。

但し、ここでは１つの矛盾が生ずる。物語ではあるものの、**かぐや姫**の要求に依って、本当に「**竜の頸に五色に光る玉**」を奪取してしまった場合、恐らくその**龍**は精気を失って死んでしまうか、或いは、弱体化するであろうが、その場合に、日本の国土は**国難**出来に際しての守護者を失う結果となり、壊滅する危険性を孕（はら）む場面に直面することとなろう。更には、**日本の龍**が、**祈雨・止雨祈願行為**や、**水中（淡水、海水）世界の支配**の場面に大きく関与していたとするならば、日本はありとあらゆる「**水災害**」に襲われてしまうことにもなり兼ねないのである。

かぐや姫が、敢えて**大納言大伴御行**にそうした要求を行なっていたのは、彼女が**龍**に

対置される存在、つまりは、**「水」を媒介とした災異の起因者**としての位置付けであり、そのことは、文中に於いて「**泣く**」の語が多く使用されていることからも窺うことができるのであった。それは**涙雨**である。**涙雨**とは、悲しみの涙が変化して降るとされる雨の語義であり、それだけでは少量の雨の意味である。しかしながら、「**泣く**」の語が多用されている状態とは、**多くの降水がある状態**と同義であり、それは「**水災害**」をもたらす**涙雨**でもあった。

❼**大納言大伴御行**等の航海中にも、乗っていた船は嵐に遭い沈没しそうになるが、その際、**雷**の存在が大きな役割を果たしていた。文中では、航海技術専門家としての船頭（「**海人、あま**」）が、**龍と雷とが連携関係にある**という認識を示す場面がある。**雷や風浪（ふうろう）といった自然現象も龍の支配下に在る**、ということなのである。特に、「**雷さへ頂に落ちかかる**」とは、**船体や人員への直撃雷**であることを示すものであるが、船体で一番の高所は**帆柱**であり、そこに**落雷**した場合、**帆柱（ほばしら）や網代（あじろ）帆等の航行上の重要設備**が破壊され、**船舶火災**に繋（つな）がる可能性さえある。その場合、船は風を受けては前に進むことができなくなり、遭難することもあったことが想定される。又、**直撃雷**を受けた**帆柱**の近くに人がいた様な場合には、そこから**人体への再放電に伴なう側撃雷**を受けることも考えられる。**感電死**する可能性である。**楫取（かじとり）**の最も恐れていた航海中の出来事とは、時化（しけ）の時に於ける**船体への直撃雷**であったのである。それを司っているのが**龍体**であるという認識であった。

「**雷**」現象とは、古来、**大音声と大発光の両面より、人々にとっては畏怖するべき存在**であった。**日本語表現法**に於いて、「**雷**」は「**神鳴り**」、「**鳴る神**」であり、語義は「**厳(いか)つ（助詞）霊(ち)**」である。従って、**雷**は、「**雷神**」、「**雷電**」とも呼称される様に、それ自体が**神格化の対象とされた自然現象**でもあった。

✾講師：小林　健彦。昭和３７年（１９６２）生まれ。新潟県柏崎市出身。学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士後期課程　単位取得　満期退学。現職は拓殖大学大学院言語教育研究科　客員教授、及び、新潟産業大学経済学部　教授。専攻は日本語運用史、日本文化論、対外交渉史。著作は『**越後上杉氏と京都雑掌**』戦国史研究叢書１３（岩田書院、２０１５年)、『**韓半島と越国（こしのくに）　～なぜ渡来人は命がけで日本へやって来たのか～**』、『**日本語と日本文化の歴史基層論　～平清盛・徳川家康・坂東太郎に見る呼称とうわさの文化～**』、『**災害対処の文化論シリーズ　Ⅰ～Ⅷ**』（２０１５年～２０２１年発行、シーズネット株式会社)、等がある。

FC2 ブログ「小林健彦教授の　著作日記」：

http://5142631.blog.fc2.com/blog-entry-1.html

（「小林健彦 FC2」でも検索して頂けます）

「research map」の小林健彦のページ ：

http://researchmap.jp/read0049976/